

「Q & A 腹腔鏡下胆嚢摘出術 こんな時どうする？」

滋賀医科大学教授・第1外科 小玉 正智 監修
 滋賀医科大学・第1外科 来見 良誠 著

三井記念病院・外科

堀 孝 吏

腹腔鏡下手術が施行されるようになってまだ10年にも満たない現在、様々な領域でこの術式の適応が拡大され、施行されるようになってきた。本術式が急速に広まった要因の1つに、術後疼痛の著明な減少＝患者側の利点が、大きく関与している。単に治ればよい治療から安全な治療へ、そしてより苦痛のない治療へと医療に対する要求が変化してきたのは当然のことと考える。

当院でも、1990年10月に最初の腹腔鏡下胆嚢摘出術が施行された。当初は、鏡視下手術は特殊な術式と考える風潮もあったが、適応が拡大されるにつれて特殊な術式とはみなされなくなりつつある。適応に関しては、まだ流動的な領域も多いが、例えば、胃全摘術はやるが胃亜全摘術はやらないという腹部外科医はいないように、腹腔鏡下手術は適応があれば避けて通れない術式になると考えられる。今や、腹腔鏡下手術は腹部外科医にとって習熟しなければならぬ術式の1つと思われる。

腹腔鏡下手術と開腹手術の大きな違いは、直接見ることや手で触れる

ことができず、開腹手術では使用しない道具を用いるという点である。このために、不安や混乱を生じやすく、手術が円滑に進まないことがある。もう1つの違いは、歴史が短いために、操作に支障を来したときに、的確な助言を(状況によっては救いの操作を)与えてくれる先輩が少ないことである。これらの違いを克服するためには、多数の人の経験やノウハウを集大成した実践に即した本が是非とも必要になってくる。

本書は、開腹胆嚢摘出術で蓄積された胆嚢摘出術に共通する基礎的な知識は省略してあり、腹腔鏡下手術に特化した部分に焦点を絞り、記述してある。そのため、従来の成書にはない、細かい部分がよく記載されている。実践に基づいた的確な問答には説得力があり、悩みや迷いに対して的確な助言をしてくれる百戦錬磨の先輩がそこにいるような感じさえ受ける。基礎編、応用編、適応編、手技編、器械編と5編に分けて執筆されているが、必要な項目をどの部分から読んでもよいような構成になっている。様々な問題点にぶつ

かったときに適切な対処ができるようになって初めてその術式に自信が持てるようになる。痛い経験を自分で経験することなく、短期間に腹腔鏡下胆嚢摘出術に自信をつけるために本書は最適である。また、適応編の中にあるヘリカルCTの応用など、患者に優しい治療だけでなく、患者に優しい検査にも言及しており、真に患者に優しい医療を目指している点など、参考になる箇所も多い。

今後、鏡視下手術はますます広範な領域に応用されるようになり、特殊な技術と位置づけられなくなる可能性が高いと思われる。本書は、腹腔鏡下胆嚢摘出術についての本であるが、鏡視下手術に共通するエッセンスが満載されており、他領域の鏡視下手術を施行する立場にいる者にとっても大変有意義な本であると考えられる。

●A5 頁176 図45 1996 定価
 3,914円(税込) ㊦400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)